

色の使われ方の歴史とその応用 —時代区分による色の使われ方の分析—

History of the use of the color and its applications —The analysis by period color—

山羽 和夫	Kazuo Yamaba	日本福祉大学	Nihon Fukushi University
水谷 基人	Motohito Mizutani	日本福祉大学	Nihon Fukushi University

キーワード：時代区分、商品色彩、色の歴史、色の使われ方、
色彩応用

Keywords: The age division, Goods color, History of the color,
The use of color, Color application

1. はじめに

近年、地球環境保全で我が国特有の木として圧縮加工した杉の木の使用が検討されてきており、教育現場では、欠席児童の少ない素材としてその効果が注目（滋賀県の例）されている。こうした杉の木を使用するうえで色彩設計もまた色彩の重要なマーケティング戦略の要素の一つとなろう。

ここでは、歴史的な色に着目し、それぞれの時代時代にどのような色が使用されてきたかについて調査し、その結果に基づいて商品色彩に応用できないかということを中心に、それぞれの時代の色にどのような傾向があるか調査し、時代区分における色の使われ方について分析した結果を報告する。

2. 調査方法

本研究では、これまでの我が国の時代を、飛鳥・奈良時代(603~794年)、平安時代(794~1192年)、鎌倉・室町時代(1192~1603年)、江戸時代(1603~1868年)、明治・大正時代(1868~1926年)、現代(1926~2004年)の6つに区分して、日本の伝統色(長崎盛輝著、京都書院アーツコレクション)に記載されているそれぞれの時代における色250点に付いて、マンセル値から、RGB値、ならびにL*a*b*値に変換した各値²⁾を参考に、さらにインターネット上から集めた伝統色といわれる285点の合計535点について、フリーソフトを用いて、それぞれの時代のL*a*b*値を求めた。

3. 結果と考察

ここでは、色に関わる文化的背景に付いて調査した結果について述べる。多少教科書的になっていることをご容赦願いたい。

飛鳥・奈良時代、鉱物、植物から色を抽出する

技術が中国から伝わり、鉱物・植物性顔料の使用が普及した。飛鳥時代、朝廷内の「冠位十二階」の色の序列は当時の技術では染めにくい順であった。

奈良時代、五行思想が中国から伝来し、「色彩」は青、赤、黄、白、黒の五色で、それぞれが季節、方向、聖獣に対応するとして解釈され、様々な律令、都市計画の規範として使用された。

平安時代になると、中国の影響下あった文化の形態に日本独自の美意識が発達し、「雅な」配色美を楽しむ風潮が生まれてきた。特に貴族の貴婦人達は、十二単を着用するときに表衣と裏衣を別々な色を用い、着用する際に四季折々の植物、風物の名前をつけ、季節に応じて、その「襲の色目」を愛でた。

鎌倉・室町時代、黒を基調とした文化が栄え、雪舟、雪村といった優れた禅僧画家による水墨画の世界を創出。

安土桃山時代には千利休によって「侘び茶」が完成され、草庵風の茶室を作り、陶工長次郎が焼成する黒の楽焼を愛し、地味色を愛でる伝統を作り上げた。一方、狩野永徳一門によって金色を使用した金彩美の文化が広がっている。

江戸時代、幕府は町人の華やかな生活を戒める「奢侈禁止令」を出した。その結果、茶色、灰色、藍色が流行した(四十八茶百鼠)。

紫は江戸時代も貴人用の色で庶民は身につける事ができなかった。なんとかその紫色を身につけようと「偽紫」として使った「江戸紫」、が流行した。色の流行の元となったのが市川団十郎、中村歌右衛門らの歌舞伎役者で、役者の屋号から「璃寛茶」、「芝翫茶」といった茶系の色も誕生した。

明治・大正時代、日露戦争時に軍服の色として採用された「国防色」、勝つという意味で「褐色」を「勝色」と呼んだことで、「国防色」、「勝色」が流行した。

現代、伝統色だけでなく外来色の導入により色のバリエーションが増える。

以下、各時代の色の傾向について2. で示した調査方法にしたがって伝統色の資料から算出した結果を基に追究する。

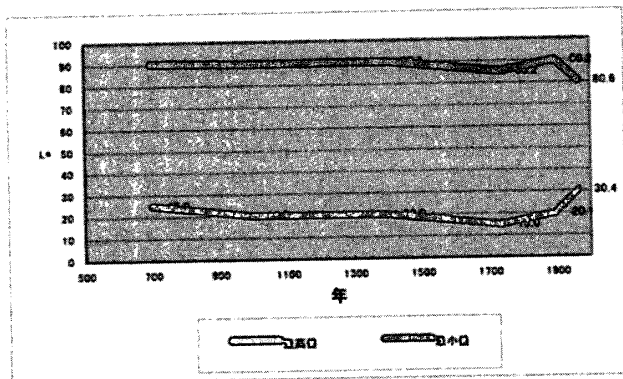


図1 各時代とL*値の変遷

飛鳥・奈良時代から鎌倉・室町時代まで大きな変化はないが、江戸時代、地味色の流行により最大値、最小値が下がるが、明治・大正時代にはまた飛鳥・奈良時代から鎌倉・室町時代までの値に戻るが、現代になると個人が求める色が細分化され最大値、最小値の差が狭まっていく傾向が見られる。

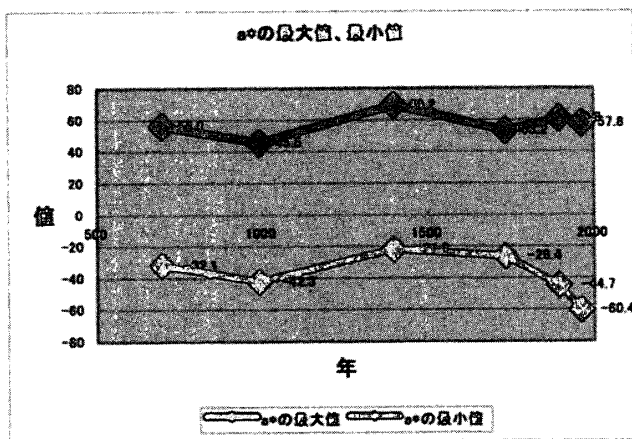


図2 各時代とa*値の変遷

飛鳥・奈良時代を基準として考えたとき、次の時代、平安時代は値が最大値、最小値がおおよそ10下がっているのが分かる。こういった背景には、多くの赤系の色名がこの時代に誕生し、その多くは主に濃色系が関係していると考えられる。この時代の染色技術では濃い色の方が技術的に困難とされた(禁色)。この禁色の誕生が最大値、最小値を10下げてきたのではないかと考えられる。

鎌倉・室町・桃山時代は色彩による文化は平安時代の内容でもって転用されているため色の数が少なく、平均がそれぞれ最大値、最小値とも高く

なった。

明治・大正時代からは江戸時代と比べ、最大値と最大値の差が広がっていく。これには、江戸時代から続いていた奢侈禁止令が解け、その反動によるものと考えられる。

現代、最大値と最小値の差が明治・大正時代に比べ更に広がっている。これには、人々による色の選択の幅が広がったことが関係していると考えられる。

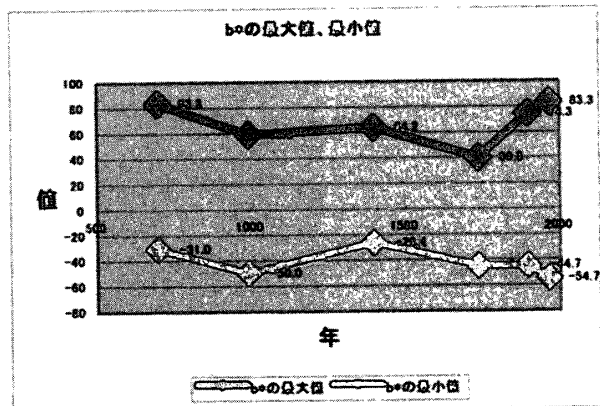


図3 各時代とb*値の変遷

飛鳥・奈良時代を基準として考えたとき、平安時代は位階による服の色で黄色が使用されなかったことや青系の色が使用された結果、最小値を下げたと考えられる。

鎌倉・室町・桃山時代は色彩による文化は平安時代の内容でもって転用されているため色の数が少なく、平均がそれぞれ最大値、最小値高くなってしまった。

明治・大正時代は江戸時代の奢侈禁止令の反発もあって、最大値が急激に上がる。外国からの輸入染料の普及により、地味な色から派手な色へと変わった事は、色の歴史にとっては激動な時代といえよう。

現代、最大値と最小値の差が明治・大正時代に比べ更に広がっている。これには、人々による色の選択の幅が広がったことが関係していると考えられる。

4. おわりに

今後、母集団を増やす意味で、色の名前事典(福田邦夫著)、本の色辞典(吉岡幸雄著)や、さらにはインターネットによる元のデータ点数をフォローしていく予定である。そのうえで、商品色彩への適用を考えている。

参考文献

- 1) 永田泰弘、新版色の手帖、小学館